

(ESD)

## 「学びに向かう力の育成をめざして」

### ー未来を見つめる心を育むー

大阪市立南小学校 池田花笑子・西浦寿信

#### 1. 研究主題設定の理由

本校は、在籍数の約45%が外国籍もしくは外国につながるのある子どもたちである。つながる国も多様で、現在は12の国や地域におよぶ子どもたちが在籍している。こうした特色をふまえ、多様な価値観が尊重され、多様な立場にいる子どもたちが安心して過ごすことができる多文化共生の学校をめざしている。

ちがいを乗り越えてつながっていく、あるいはちがいに折り合いをつけながらつながっていくことができる力を育み、様々な価値観があふれる中において、自立した個人として、自分の足でしっかりと立つことができる子どもたちに育つことを願って、研究主題を設定した。本校に在籍する様々な背景をもった子どもたち一人一人が社会に対する希望をもち、未来を切り拓く力を身につけるとともに、自らの未来に対する当事者意識を育む学習活動の研究を進めてきた。

#### 2. 研究の趣旨

本研究は、Education for Sustainable Development(ESD)の学習活動とその評価方法を学校全体で体系的に開発し、子どもたちに持続可能な社会の担い手となるために必要とされる価値観や態度、力を育むことを目的としている。「DESD 国際実施計画」(ESD-J 2006)によれば、ESDが持続可能な社会を形成する普遍的な価値に関わる教育であることがわかる。子どもたちが、持続可能な未来に向かう普遍的な価値と向き合い、何度も問いを立て、繰り返し思考することで新たな価値観を根付かせ、持続可能な社会を築くことにつながる行動ができるようになるのではないだろうかという仮説のもとに研究活動に取り組んだ。

#### 3. 研究の概要

「学校の特色を活かした ESD の学び」「教科等横断的な学習活動の開発」「主体的な学びに適した学習活動の構成」「ESD の評価方法」の4点についての実践研究に取り組んだ。

##### (1) 学校の特色を活かした ESD の学び/教科等横断的な学習活動の開発

「国際理解プロジェクト」と「地域学習プロジェクト」の2つのプロジェクトを教科等横断的に取り組み、ESDカリキュラムとして体系的に整理することで、ESDの視点に立った学びを推進した。

##### 【国際理解プロジェクト】

世界の様々な国の文化や習慣に対する興味関心を養い、異なる文化背景をもつ人々との協働作業に積極的に取り組もうとする態度を育む。このプロジェクトにおいては、日々、ともに学校生活を送っている友だちとの文化的・習慣的な差異を科学的にとらえて、理解する学習活動をすすめるとともに、世界で起きている様々な課題に目を向ける学習活動にも取り組む。すべての人々が安心してくらせる社会の実現に向けて、自分たちにできることを模索しようとする態度を育む。

## 【地域学習プロジェクト】

自分たちの町の特徴を知り、地域の人々が守り育ててきたものや思いを知ることを通して、自分たちの町に対して愛着をもち、自分たちが将来の町の担い手となることを意識できるようにする。これまで、地域の人々とともに積み重ねてきた学習の持続的な発展をめざす。

### (2) 主体的な学びに適した学習活動の構成

主体的な学びを構成するために、「対話的な学び」と「行動に向かう学び」の2点に重点を置いた学習活動計画を立てた。特に、「対話的な学び」については、話し合いの場の工夫を通して、どの子どもも安心して学習に取り組むことができる環境を整え、できるだけ多くの意見を交流することができる方法についての研究をすすめた。

### (3) ESD の評価方法

それぞれの教科の中から見出した ESD の要素を ESD で育みたい価値観・態度・力に照らして、ESD の評価規準として独自に設定するようにした。評価の観点についても、現行の指導要領では4観点であるところを次期学習指導要領で示されている資質・能力の要素の3つの柱をもとにして、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点を本校の ESD の学習状況を評価するための観点とするようにした。学習指導要領のもと、ESD の学びを教育課程の中に位置づけるために、扱う教科の学習目標の達成を目指しながら評価規準を作成するようにした。

## 4. 研究の成果と今後の課題

### (1) 研究の成果

- 「みなみ ESD カリキュラム」を策定したことで、教科学習の中で ESD に関わる価値観や身に付け態度や力を見出すことができた。
- それぞれの単元の学習目標を見極め、効果的な組み合わせを考えて、横断的に組み立てることでより学習効果の高い学習活動計画にすることができた。
- ロールプレイやシミュレーション、KJ 法、ウェビングといった参加型のアプローチが子どもたちの主体的な学びを引き出すきっかけとなった。
- それぞれの教科領域等を4次構成で組み立てたことで、「行動に向かう学び」の効果的な学習活動計画にすることができた。

### (2) 今後の課題

- 効果的な教科等横断的な学習活動を組み立てるために、年間の学校行事や各教科領域等の指導計画を見通して学習活動を計画する必要がある。
- 「みなみ ESD カリキュラム」の学習目標を明確にするとともに、「国際理解プロジェクト」と「地域学習プロジェクト」それぞれに対する発達段階に応じた評価規準の設定が必要である。
- 子どもたちが様々な意見の中から新たな考えを構築する力を身に付けるために、どのような思考スキルや場面設定が適切であるかということについてさらに検討する必要がある。